

経営部門

福島県西白河郡西郷村

阿部 弘・阿部 フミ子

「土、草、牛」と我が家の経営

—大地に生きる21世紀の酪農—



阿部さんご夫妻

阿部弘、フミ子夫妻の経営は、「土づくり、草づくり、牛づくり」を経営の基本とし、個体観察の徹底とカウコンフォートなどによる生産性の向上、発酵豆腐粕の利用や自給飼料生産による低コスト化、完熟堆肥生産による資源循環型酪農を追求してきた。

当経営は、昭和33年に弘氏の父親が現在経営を営む西郷村に入植し、2頭の乳牛を導入したのが始まりである。弘氏は、農業高校卒業後、自動車修理工として働きながら家業を手伝い、昭和56年に経営移譲を受け、サラリーマンと酪農家(成牛6頭、育成牛3頭)の「二足のわらじをはいた」生活を始めた。この両立の生活の中で「いつか本格的に酪農をしたい」と思い描き、昭和58年に30頭つなぎ式牛舎を新築するなどして徐々に規模拡大を行っていった。平成元年に会社を退職し、酪農専業となってからは、自給飼料基盤の拡大を図りつつ、先進地研修を重ねながら夫婦で自分たちの目標とする頭数規模、飼養形態、搾乳方式を検討し、平成8年に60頭規模のフリーストールを導入、さらなる規模拡大を目指した。平成14年現在、家族労働力3人で経産牛67頭、育成牛40頭、自給飼料基盤23.2haの経営を行っている。

当経営の特徴のひとつは、生産性向上のため、個体の観察に重点をおき、日々の健康管理、病気の早期発見、早期治療を心がけていることである。自動車修理工時代に身につけた技術を活かし、削蹄用保定枠を作成し自ら削蹄を行い、フリーストールで発生しやすい蹄病の予防に努めている。また、清潔で十分な敷料のベッドとこまめな換気で

牛がゆったりと休める畜舎環境づくりを行っている。自ら行う人工授精と毎月1回の繁殖検診で長期不受胎牛の摘発と管理の見直しを行い、受胎率も向上し、分娩間隔は13.4カ月に短縮された。

二つ目は、飼料費の低コスト化の取り組みである。規模拡大にともなって増大した購入飼料費を抑えるために発酵豆腐粕を利用している。このことにより、安定した泌乳成績も得られるようになった。また、近隣の離農跡地を積極的に借地し自給飼料基盤を拡大し、粗飼料生産にも力を注いでいる。その結果、自給飼料生産コストはTDN単価で32.6円と府県水準のほぼ半分で、生乳1kg当たり生産原価は59.6円という低コスト生産を実現している。自給飼料の利用に当たっては定期的に粗飼料分析を実施し、飼料設計を丁寧に行っている。

三つ目は、ふん尿処理に積極的に取り組んでいる点である。規模拡大にともなうふん尿量の増加を想定し、平成8年のフリーストール導入時に堆肥発酵処理施設を整備し処理を行ってきた。その後、堆肥舎を建設し、現在では出来上がった完熟堆肥を飼料畑へ還元するほか、地域の耕種農家へ供給し資源循環型酪農を実践している。

以上の結果、平成14年には経産牛1頭当たり産乳量10,000kgを達成し、安定した泌乳成績を維持している。本格的に酪農に取り組んで14年、ほぼ一代で総所得2,215万円、経産牛1頭当たり32.7万円、所得率33.2%を実現している。地域の条件を活かしながら、自給飼料生産を図り、規模拡大を着実に行って成功を収めているバランスのとれた優れた土地利用型酪農の事例といえる。

活動のすかた



▲阿部牧場の全景

JR 東北新幹線「新白河」駅から車で20分のところに牧場はある。牧場周辺の土地を借地して確保。自給粗飼料により低コスト、安定経営を目指す。



▲阿部牧場のシンボル

牧場は阿部夫妻が一代で築いた。施設、機械も体系的に装備し、大地に生きる酪農を実現している。



▲牛舎の概観(フリーストール・アプレストパーラー方式)

きれいに清掃されており、消費者がいつ訪れても「安心・安全」の生産を心がけていることを見てもらえる。いま、食料生産に携わる酪農家にはこのことが求められている。

▼自動給餌機

ビートパルプに豆腐粕6%を混入。1日1頭4kgを給与するのが特徴。これで安定した泌乳効果をもたらした。



▼排せつ物処理施設

いずれの産業も排せつ物の処理が問われる。酪農も適正に処理してこそ地域の産業として認められる。他との共存のためにも超えなければならぬハードルだと思い、整備した。

